

# 「成人式」を迎えて

黄英哲

個人的なことになるが、今年は一九八五年に來日してから、ちょうど二十年目にあたる。在日外国人として「成人式」を迎えることができ、私の感慨もひとしおである。

日本の友人からよく「なぜ日本に留学に來たのか」と尋ねられる。台湾では、アメリカやヨーロッパへの留学が大半で、今も昔も、そしてたぶん今後も、日本への留学は少数派である。日本の友人には私はいつも「日本が好きだから」と答えている。私はひとつ上の世代の「哈日族」(日本フリーク)だといえよう。ただ、最近、年齢のせいもあってか、なぜ日本が好きなのかを客観的に分析するようになった。その結果、それは私の幼

年期や少年時代の記憶に係っているのではないかと考えるようになった。

私の祖父は、戦前、台南師範学校を卒業したあと国民学校の教員となり、戦後も小学校の校長を務めていた。父母も日本敗戦の時点で国民学校を卒業していた。つまり祖父も父母もともに完全な日本の教育を受けた世代に属している。私の記憶の中にある祖父と父母の会話は、台湾語(閩南語)の中に多くの日本語が交じっていた。私が幼いときには、父母から日本の童謡をたくさん教わった。今でも「ももたろうさん、ももたろうさん。お腰につけたきびだんご、ひとつわたしにくださいな」「雨 雨 ふれ ふれ かあさん

が 蛇の目でおむかえ うれしいな ピッチピッチ チャプチャプ ランランラン」といったフレーズは耳に残っている。

また、小学校のときの、日本映画との出会いも私の人生に大きな影響を与えた。私はひとりっ子のうえに引つ込み思案であった。当時は台湾のベビーブームにあたり、ひとりっ子はとてもめずらしかった。本来は大切に育てられるところだが、あのころの台湾はまだとても貧しく、父は「起業家」を志し、母は父の会社の事務や會計の仕事が忙しく、私の世話をする暇はなかった。ましてや、もう一人子どもを産むような時間的余裕はなく、私はいつもひとりぼっちだった。

私が子ども時代を過ごした六〇年代は、ちょうど日本映画の全盛期にあたる。冷戦時代、台湾は西側陣営に属しており、大量にアメリカ文化が流入していたのだが、

実際は、文化面では台湾は依然として日本文化圏内にあり、一般大衆にはハリウッド映画よりも日本映画が好まれた。日本映画は大都市のみならず、私が住んでいた台湾南部の小さな町でも毎日映画館にかかっていた。子どもの頃、私はいつも近所の「東和」という名の映画館に出かけ、ガタガタきしる椅子に腰掛け、日がな一日、映画を観ていた。その場末の映画館は専ら日本映画を上映しており、銀幕の中の日本は、私の憧れであり、ひとりぼっちのさみしさを慰める唯一のものだった。当時、「東和映画館」のキップ係は母の友人で、私は映画館への出入りが自由だったのだ。今でも「タダ見」に目をつぶってくれたことに感謝している。

子どものころ見た数えきれない日本映画の中でも、今に至るまで忘れられないのは、『愛と死をみつめて』『青い山脈』『キューポラの

ある街』や、一連のやくざ映画シリーズなどである。六〇年代は、日本の青春時代であり、純情時代であり、義理人情を重んずる時代でもあった。こうした、戦後の最もよき時代の日本の空気（日本社会の中に本当にあったかどうかはこの問題ではなかった）を、私は銀幕の中で学んだのだ。その後、九〇年代初期であつたらうか、私は大阪梅田の映画館で、『ニュー・シネマ・パラダイス』を観たのだが、そのとき私はまるで映画の中の主人公である「映画少年トト」であるかのように感じたものだ。私は主人公のように結局、映画監督にはなれなかったのだが。

六〇年代の台湾では、日本映画が流行しただけではなく、日本のベストセラーもまた中国語に翻訳されて人気を博していた。とくに『二哥』（にあんちゃん）と『氷点』は今でもよく覚えていた。『二哥』の安本末子が苦境の中でも明るく

力強く生きる姿や、『氷点』の辻口陽子が愛憎渦巻く中で愛と寛容の精神でもって懸命に生きる様子は、私の脳裏に焼き付いており、末子と陽子は私の日本女性の理想像ともなった。

思い起こせば、私が日本に留学したのも至極当然の成り行きといえよう。

私が日本の地を初めて踏んだ一九八五年、日本は輸出主導の好景気の真只中であり、筑波の科学万博が開催されたのもこの年であつた。あのころ、日本はとても活力に溢れ、道行く人々はみな忙しそうで、その表情も自信に溢れ、所作もきびきびとしていて礼儀正しかった。巷に流れていたのはチェッカーズの歌だった。「涙のリクエスト、最後のリクエスト。最後のコインに祈りをこめて、Midnight D.J. ダイアル回す。あの娘に伝えて。まだ好きだよと。……」私が来日したころの日本社

会の雰囲気は総じて明るいものだった。

しかし、一九八五年の当時、私はいくつかの衝撃的な出来事に出くわしている。一つは、私の尊敬する学者王育徳先生が急逝されたことである。長い間憧れ、ようやくお目にかかることができて喜んだのも束の間、その翌月に届いた悲報に、私は初めて「二期一会」の意味を実感したのである。私が好きだった女優夏目雅子もこの年に急性白血病で世を去っている。

また、同年夏には日航ジャンボ機が群馬県御巣鷹山に墜落し、テレビが伝える凄惨な事故現場と懸命の救援活動の映像は、今でも忘れられない。

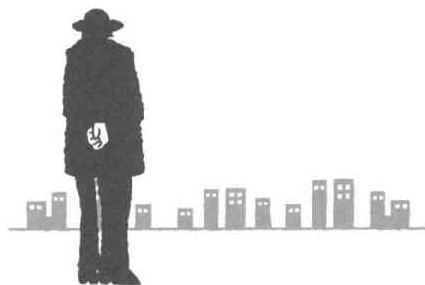
一方、一九八五年の台湾は熱い政治の季節を迎えていた。戦後四十年來の国民党の強権支配が崩壊しはじめ、抑圧されてきた台湾人意識が一気に表面化してきた時期でもあった。八六年には、台湾人

を主体とした野党の民主進歩党が初めて設立され、台湾内外の台湾人の反国民党運動は一つの高揚期にさしかかった。その当時、多少とも良識を持った人々は、等しくこの運動に身を投じたものだ。

関東の大学にいた頃、私も反国民党運動に加わっていたので、勉強の方はなおざりになってしまった。大学院進学が順調に行かず、挫折感にうちひしがれていた私は、思い切って、関東を離れ関西で出直しをはかろうとしていた。

結局、学位を取得するまでの十一年間、相前後して関東・関西の五つの大学に「出入り」を繰り返していた。今に至るまで、私のようなとんでもない留学生を受け入れてくださった指導教授の方々に感謝している。

「名もなく、貧しく、美しく（これは余計かも!）」の留学生から出発し、紆余曲折を経て日本の大学の教壇に立つことになった私も、



とうとう今年で来日二十年である。あつという間だった。しかし、この間、日本は大きく変化し、台湾にも大きな変化が起こった。とりわけ、台湾研究者としての私からみれば、この変化は劇的ともいえる。

一九四九年以後の中国と台湾に対する日本人学者の認識は、個人の政治信条や信念によってかなりの差異がある。冷戦時代、「進歩的」左派知識人をもって自任する人々は、台湾や台湾人を国民党や保守反動の代表と同一視していた。民主化後の台湾では、台湾人が選挙を通じて政権交代を選択するに至ったのだが、かの「進歩的」知識人はまたしても、台湾や台湾人を民主進歩党と同一視し、反動だとしている。反動の対極にあるのは相も変わらず中国である。台湾の「人民」の存在を無視し、台湾の「人民」の心声に耳を傾けないのなら、台湾の「人民」の歴史

記憶とアイデンティティの問題を理解できようはずはない。

周知のごとく、二〇〇〇年以降の台湾では、嵐のように台湾中に吹き荒れた各党各派による派手な総統選挙キャンペーンや、その後に生じた国民党から民主進歩党への政権交代などが要因となり、さまざまなエスニック・グループ間の対立が表面化、先鋭化している。複雑な生成過程を経た各グループが「台湾」アイデンティティの確立に向けて熾烈な議論をくりひろげている。自己のアイデンティティ確立のために複数のエスニック・グループ間で相克が生じるといった台湾の錯綜した状況を理解するには、まず各エスニック・グループの台湾における歴史的地理的な記憶の多様性と多重性——つまり一つの台湾という地理的空間に異なった複数のエスニック・グループが昔から同時に存在して今日の台湾を形成しているという事

実を直視しないわけにはいかない。とくに、日本の台湾統治時代の記憶は、台湾社会のさまざまな部分に浸透しており、現在に至るまで台湾人の生活史の一部を構成している。戦後に生まれた私のような台湾の団塊の世代もまた、上に述べたようにさまざまな形で日本の記憶に左右されているのである。

日本の植民地統治権力が台湾に残した大日本帝国の記憶は、現在の台湾人の精神的血肉の中にどの程度受け継がれているのか、また帝国が強要した文化の傷跡は現在の台湾にどの程度留まっているのであろうか。在日外国人として「成人式」を迎える私のこれからの課題は、少年時代の個人的な日本経験への思いを客観的に分析することだともいえる。

(愛知大学現代中国学部教授)